

育児中でも働く女医さんが増えますように

国保中央病院小児科 中農 昌子

このコラムを読む方は出産後の仕事について考える小児科の女医さんだと思いますので、その先生方へ書かせて頂きます。

私は平成8年奈良医大卒で、奈良医大小児科に入局しました。現在は泌尿器科医の夫と、医師5年目以降に出産した三姉妹がいます。結婚後、出産や子育てしながら奈良医大小児科関連病院に勤務し、各病院で当直回数は平均2、3回、当直日には同居していない私や夫の両親が三重、大阪から手伝いに来てくれています。

今までの悩みも他の先生方と同じようなことですが、今となれば悪い結果にばかりはなってはいません。例えば“時間外呼び出しや休日病棟当番も子どもを頻りに同伴→勤務医は会社員と同じで親の働く姿を見ることもないので、親の背中を見せられて良かったかな。”“当直や子どもが病気の時、両親に頻回にお世話になる→毎日の生活に必死の親に比べて無条件に甘えられる祖父母の存在は、子どもの精神的ゆとり。”等です。

そして、子育てしたからこそ経験する、母乳をあげる時の子どもの愛おしさ、離乳食を食べてくれない時の焦燥感、他の子と比べて焦る気持ち、真っ暗な保育園へ迎えに行く時の申し訳なさ、高熱でぐったりした子を抱く時の不安、友達関係で悩む我が子への心配等これらの感情から生まれる共感やアドバイスは多くのお母さんたちを安心させることができますと思います。小児科医は自分の子育て経験をとても活かせる仕事だと考えています。

でも私が今までやってこられたのも家族の理解と我慢と健康のおかげで、そんな条件がそろわない方も多く、女医は経済的に余裕がありがちなので我が子を思って離職を考えるときのハードルは低いと思います。そういった現状について周りのアラフォー子育て女医たちと話していて感じるのは、7、8割の働きの女医でも数がいたら全体が楽になり、病院にも十分貢献できるはずだから、もっと働き方を工夫して辞める人を減らせないか、といったことです。例えば短時間勤務を導入できないか、当直明けは朝イチで帰れないか、などで、幸いそれを了解してくれる職場の上司や同僚たちも最近が増えていて、先輩医師たちは若い女医さんが仕事を続けられるよう応援している場合が多いと思います。そういった状況に甘えすぎることさえしなければ自ずと道は開けてくることも多いので、自分なりに医師の仕事が続けられる方が増えることを期待します。

なかのう あつこ

<著者略歴> **中農 昌子**

国保中央病院 小児科部長

平成 8 年 奈良県立医科大学卒業

夫と三姉妹(小 6、小 4、小 1)の 5 人暮らし

～**男女共同参画推進委員会**より～

日本小児科学会では、男女共同参画に関連したきめ細かな情報を含めた小児科医向け求人情報システム「小児科医バンク」(<http://qolpro.umin.jp/>)を2006年から運営しています。結婚、出産・育児、介護などで一定期間現場から離れた小児科医が職場復帰する上で必要な情報の提供を目的としていますが、現在、同様の目的を持ってインターネットを利用したさまざまな試みが行われるようになりました。日本医師会女性医師バンク(<https://www.jmawdbk.med.or.jp/app/pzz000.main>)が2007年から稼働していますし、民間(有償)のものもあります。e-ラーニングシステムとしては、小児科学会会員専用ホームページで2005年より「JPS 専門医オンライン・セミナー」および「JPS 生涯教育オンライン・セミナー」が提供されていることはご存じのことと思いますが、特に女性医師向けのe-ラーニングシステムとして、東京女子医科大学女性医師再教育センターの教育・学習支援プログラム(<http://www.netlearning.co.jp/clients/twmu/top.aspx>)などもあります。

子育てや介護の合間にでも、いつでも利用可能なこのようなシステムも男女共同参画社会を作るうえで有用なツールとなるものと思います。

※「小児科医バンク」は2019年12月をもってサイトを閉鎖いたしました。